

1973年5月創刊の前身誌『紙とプラスチック』から数え『コンバーテック』は今号で通巻600号に到達！

業界内の連携強化に期待。 将来ビジョンから逆算し 今から走り出したい

600号記念企画第1弾として、グラビア印刷機、コーター、ラミネーター、金属印刷機・塗装機を主力製品とする、日本のコンバーティングマシン業界におけるリーディングカンパニーの1社である富士機械工業(広島県東広島市)の和田龍昌社長へのインタビューをお届けします。テーマは「10年先を見据えて成長を続けるために、今、向き合うべき課題は」。環境対応の重要性や海外ビジネスの拡大といった話題が挙がる一方、機械メーカー単独での取り組みには限界があり、企業間や業界内での連携強化と、あるべき将来像を共有することへの期待が語られました。今回、取り上げた目標がどれだけ達成されたかは、700号(2031年7月号)にて取材予定です。

(記 的場大祐)

——コロナ禍における御社の事業状況はいかがでしょう。また、経営者として感じたことは。

2020年春のコロナ禍の本格化以降、しばらくは新規の受注が沈滞化した時期もありましたが、徐々に回復してきて、「それほど大きな影響はないかな」と思っていたところに、半導体不足の問題に見舞われました。『供給量は元に戻ってきている』という見解を聞くこともありますが、少なくとも当社の場合は、23年に入っても解消には至っていません。納期の長いものは1年半ぐらいみていただく状況で、お客様にはご迷惑をおかけしています。状況が改善するにはもう少し時間が必要と考えています。

また、コロナ禍は、海外ビジネスの在り方を見直す機会となりました。例えば、中国は重要なマーケットの1つですが、現状でも移動の不自由さは十分に解消されていません。また、ロシアのウクライナ侵攻も、物流などの面で影響は皆無ではありません。

感染が落ち着いてきた現在、事業継続という課題に改めて



和田龍昌社長

向き合う必要性を強く感じています。具体的には、世界的感染症や戦争の最中であっても、国内、もしくは海外の顧客に製品を送り、生産ラインを立ち上げられる仕組み作りになります。実現のためには、特に海外の技術力のある会社との

ネットワーク構築が不可欠であり、今は情報収集を進めている段階です。

一方、改めて実感しているのは、国内でも海外でも、どんな状況であってもコンバーティングマシンに対する一定の市場ニーズが必ず存在するという事です。ニーズはありますので、後はそれをキャッチできるかどうかが問題になります。一昔前であれば、機械メーカーに必要なのは技術力であり、いい製品を造っていけば間違いなく売れると